

平成の時代の琵琶湖漁業を漁業者からの視点での現況について
(松岡委員からの提供資料)

松岡委員から琵琶湖部会に情報提供して欲しいと要請があった、滋賀県漁業連合組合からの意見です。

平成の時代の琵琶湖漁業を漁業者からの視点での現況について

琵琶湖で操業する第二種漁業権者の実体験に基づき、ここ十数年間で感じる現況について、明確な数値・データはありませんが、漁業者各々の立場の中での漁獲量の違いを申し述べます。

まず最初に、主な魚種と漁獲について。

現状維持しているもの ————— ピワマス・アユ。これらについては、県及び漁連が行う増殖事業の結果、資源量については何とか現状を維持しておりますが、品質面での評価が大変低下しており、アユについては冷水病・シュードモナス病等の魚病によることと縄張り意識がなく友釣りに適さなくなったこと等の原因で、従来琵琶湖が全国へ販売していたシェアの半分近くにまで落ち込んでいます。ピワマスについても、その肉質の味の部分について、従来のピワマス特有の独特の赤身とさっぱりとした脂の乗った味覚がなくなっており、これについては、琵琶湖に従来大量に生息していたエビが減ったため、餌とするものが偏っているためと考えられます。

次に、絶滅の危機も含めて大幅な漁獲減少をしている魚種 ————— これは、琵琶湖に従来生息してきた魚種全てにおいて大幅な減少傾向若しくは絶滅の危機に瀕している。漁業者の立場から、漁獲して所得に繋がる魚種の中で大幅な減少が見られるものについてはニゴロブナ・モロコ・エビ・イサザ・シジミ・フナ・ハス・ウグイ等々が列挙されるところであります。

一方、この話の中で琵琶湖の中で増大傾向をほこっている魚種として、ワカサギ・ブラックバス・ブルーギルが挙げられます。ワカサギについては、漁獲・魚種の対象又その生体についても漁師には抵抗はないが、ワカサギは本来、琵琶湖の中にほんの少ししか生息していなかった魚種でしたが、現在は孵化時期がアユとワカサギ双方は秋と春先と大きく違うため双方が餌として補食されています。どちらが強いかわからないが、そこまでの研究はまだ到っていません。ワカサギについては、平成6年の大濁水時に農業用水に紛れて琵琶湖へ大量に流入したと思われれます。(今年の4・5月の濁水も同類似)

さて、ブラックバス・ブルーギルについては、過去20年程前から琵琶湖の中でちらほら見受けられるようになり、その繁殖力と肉食魚である特性を生かして一気に爆発的な増大をしたことが、上記に挙げた魚種が餌として捕獲されるため漁業者にとっては痛い打撃となっていると考えられます。特に、琵琶湖の南湖を中心にその生息数は拡大のまだ一途にあり、漁業権の存続すら危ぶまれている。生態系が僅か二・三の魚種で、ここまで落ち込むと同時に破壊されるとは誰も予測のつかなかったことであろうと考えます。

次に琵琶湖の水質問題に関して。 ————— 昭和40年代に入ってから経済成長と農業近代化等によって、琵琶湖の水質は悪化の一途をたどっています。特に、農業における圃場整備(用水と排水が分離された)によって、農業機械の大型化・化学肥料・農業の三つに大きく依存する農業に変革してから、その排水は大変な濁水となって(4月終わりから5月中頃)琵琶湖の沿岸部を覆い尽くすほどであります。大量の降雨期には田圃の中をコイやフナが泳ぎ回るほどであったが、農業のあり方の変革の中で最初にこの影響を受けるのが低生魚類であります。イサザ・シジミが減少し始め、その次に同時期琵琶湖の沿

岸部を産卵場所に行っている、ニゴロブナ・モロコ・フナ・コイ等の魚類が減少していきま
した。

その上更に、琵琶湖の水質を循環させるためのほとんどの河川は、その上流部において
頭首口を設けて農業用水及び生活維持管理用水なる名目で大半の水が取水され汚されて琵琶
湖へ流入して来ます。本来、河川の本流に清流が流れて琵琶湖へ灌ぐことで、琵琶湖の
水質は維持されてきたと思われまじ、その一方で、農業排水が流入する河川は、その琵琶
湖の沿岸部にほとんど内湖を有しており内湖中で沈殿すると同時に、ヨシ・アシ等の水
性植物により浄化され琵琶湖へゆっくりと流入していきました。この時代には琵琶湖の水
質について何も議論することはなかったし、この時代には琵琶湖の水を直接飲料水として
いた集落も沢山ありました。

無くなってしまったものを兎や角言っても仕方ありませんが、それを補足するだけの
濁水なり水質環境に対しての強い関心と注意を怠ってはいけなところであり、行政から
もそのための監視・規制を強めるべきと考えます。

さらに、琵琶湖の源流を発する山間部においても、ダムに代表される林地開発が急速な
事業展開で進捗しています。昔なら可能でなかったようなトンネルと橋梁工事等が技術開
発の進歩と共に可能になり、大型重機を投入して大変な山村部に道路網の整備がされてい
ますし治水・利水を名目にダムが何箇所も出来てきましたし、洪水調節・水利用計画を前
面に今後も進行していくようでもあります。この過程で、工事による濁水の流出も見逃す
ことが出来ないものになっています。（大きな河川では、県による河川工事・道路工事・
私企業の工事も含めて河川漁業にも大きな被害を出している所も出てきています。）

先に述べたように、治水・利水の目的の中で、本来本流に水の流れなくして環境問題
琵琶湖の場合、語るのはおかしいと思います。と同時に、琵琶湖より下流——淀川水系
にはその水を沢山の人達が更に利用されているわけです。巨大ダム湖型琵琶湖の水質環境
が淀川水系の原点であろうと考えます。（他に類を見ない、一度河川から流れこんだ水が
淡水湖に溜まってまた流れる。）全国内水面における漁業の中で、ダムが出来たことで大
きくその漁獲なり魚種が増大され増殖されているという例はほとんど私達の耳には入って
いない現状の中で、琵琶湖漁業を取り巻く全ての環境が益々悪化していくと考えざるを得
ません。漁業者は厳しい自然条件の中で漁業を行うため安定した所得を得られませんが、
先にも述べましたように、ここ数年来の魚種の減少と漁獲の減少が顕著な現況下で、琵琶
湖漁業に依存しては其の生活権は守れないと危惧するところであり、その意味でも漁
業者は琵琶湖の水の監視者でもあると思っているところでもあります。

無くしたものを補って余りある政策と方法とを打ち立てて、水利用計画の中で、その水
質環境を最優先に視野に入れて、淀川水系全体が地域住民の安心した水利用計画にしてい
くべきと考えます。ちなみに、姉川においては姉川本流に湖東ダム、高時川支流には丹生
ダム、同支流杉野川には関西電力の発電ダムが進行中であり、姉川については、その工事
による影響とスキー場の造成工事等々により雨が降れば従来の数倍に及ぶ濁度の濁りが流
れ出ている現況であります。安曇川にもダム工事が進行中であり、瀬河魚類（アユ・
マス等）の遡上する河川が大半失われはしないか心配するところでもあります。